

中高ドイツ語における《指示的》 EIN をめぐる論争

橋 本 郁 雄

1. まえがき
2. ブラウネ説
3. ヒルデブラントの第3と第4の ein
4. トーブラーの批判
5. ブラウネ説に対するパウルの態度
6. ベハーゲルの説
7. フォン・クラウスの説
8. ニーベルンゲンリートにおける ein
9. 結び

1. ま え が き

私はかつて《中高ドイツ語における指示的 ein について》と題する小論文⁽¹⁾において、Nhd. の語感をもってしては、きわめて奇異に感じられる mhd. ein が、いわゆる指示代名詞的なものではなく、単なる不定冠詞にすぎないことを、Behaghel の説を援用して論じたことがある。その後、私はこのテーマに関する主要文献⁽²⁾のほとんどすべ

(1) 一橋論叢第33巻 第3号(1954) S. 24 ff.

(2) いわゆる demonstratives ein に関するもっとも重要な文献は W. Braune, L. Tobler, O. Behaghel, C. von Kraus の研究であるが、そのほか次のようなものもある。—K. Lachmann: Anmerkungen zu den Nibelungen und zur Klage (1836), S. 253, Strr. 327. 1416. 1490 f. 1696. 1710, Ders.: Anmerkungen zu Hartmanns Iwein (1843; 6. Aufl. von L. Wolff, 1959), V. 2136; K. Bartsch: Der Nibelunge Nôt. Bd. II, 2: Wörterbuch (1880), S. 88; S. Bugge: Studien über das Beowulfepos. PBB. XII, S. 371 (über ae. *án*); R. Hildebrand: Vom deutschen Sprachunterricht (1887), S. 230 f.; Ders.: Ein viertes mhd. *ein*. PBB. XIV, S. 588 ff.; Fr. Kauffmann: Notizen 2. Zu mhd. *ein*. PBB. XIV, S. 164; H. Mollers Brief an W. Braune (Braune, Zur Beiträge XV, 384). PBB. XV, S. 570; E. Hoffmann-Krayer: Zum „deiktischen“ *ein*. ZfdW. II, S. 72; Fr. Panzer: Das Nibelungenlied (1955), S. 154 ff. —以上のほか筆者未見のものとして—J. Diemer: Genesis und Exodus (1862);

てを手にする幸運——わけても Carl von Kraus の論文を読むことができたのは、特別の幸運であった——に恵まれ、従来の考察を更に進めることができた。その結果、旧稿が甚だしく不備であることを痛感させられるに至ったので、ここに改めてこの問題を取りあげたいと思う。

まずはじめに、多少ともこの問題にふれている邦語文献をあげておこう。(1) 山田幸三郎「独逸語冠詞の研究」(大学書林, 1937) S. 44 ff. (2) 雪山俊夫訳「ニーベルンゲンの歌」(岩波書店, 前篇 1939) 註 328, 804. (3) 相良守峯「中高ドイツ文法」(南江堂, 1954) S. 58. (4) 前掲拙稿 (1954). (5) 桜井和市註釈《Der Nibelunge Nôt》(南江堂, 1957) S. 60.

山田教授は R. Hildebrand の所説を紹介して次のように述べている。——《……つまり Altdeutsch では冠詞が三つあったともいふことができる。即ち der よりも弱き ein と, der よりも強き ein と der とである。der はその強さに於ては中間を占めてゐたのである。ein—der—ein. 即ちこの強い方の ein は実は定冠詞 der よりも更に強き定冠詞の役を演じてゐたのである。之は中世ドイツ語では極めて屢々用ひられた ein にして従来殆んど看過されてゐたものである。Luther はまだこの ein を用ひてヨハネ伝 10, 12 が原語では定冠詞をつけられてゐるのに, Ich bin ein guter Hirte. (我は〔その一人しか無い〕善き牧者なり。) と訳してゐる。》《尚この学者は Nibelungen 叙事詩の権威だった Lachmann の如きすらこの ein には気づかなかつたと言つて実例を指摘しているのは面白い: z. B. Uote ein edel wip [992, 3] (d. h. die wohlbekante). Hildebrand ein reke lobelich, [1837, 1] (der löbliche Held). ein schiffel, [451, 2] (jenes schon genannte).》

雪山訳「ニーベルンゲンの歌」の後註は, 328, 2 daz gehörte bi dem Rine ein riter wol getân, の ein riter について《此の不定冠

A. Beets: *een* als Pronomen demonstrativum. Tejdtschrift voor Nederl. Taal- en Letterk. VI; R. Radtke: Der Artikel bei Wolfram von Eschenbach (Diss. 1906).

詞は茲では指示代名詞の役目を有つ。彼のあてやかな騎士》の意と説明している。桜井教授の註釈は A 本（現今では B 本が代表的な定本と認められている）に対するものであるが、331, 2 (B 本 332) の註に《ein küniginne hêr: jene vornehme Königin. 不定冠詞 ein は指示代名詞的用法である。》とある。

相良教授の「中高ドイツ文法」によれば、《Nhd. ならば当然定冠詞を使うべきところに不定冠詞を用いた例がしばしばある: er kôs ein burc dier des abents sach (=er erblickte die Burg, die er gestern Abend gesehen hatte).⁽³⁾ er hete brâht eine maget, die er in gewinnen hiez (=er habe das Mädchen gebracht, das er [der Arzt] ihn gewinnen hieß).⁽⁴⁾これらの場合の ein は不定冠詞としてよりは数詞的用法 (der eine=der bestimmte) から転用されたものである。》

ここでは、特に ein の指示性は強調されていないが、数詞的用法の転用とみる点注目に値する。更に注目すべきは、参考文献として H. Paul- L. E. Schmitt: *Mittelhochdeutsche Grammatik* (15. Aufl. 1950) の代りに、H. Paul- E. Gierach (版は示されていないがおそらく第 12 版であろう) があげられていることである。というのは、前者は ein の指示代名詞的用法を全く否定しており、後者とは異なる見解の上に立っているからである⁽⁵⁾。後者 Paul-Gierach 第 12 版 (§ 225) は W. Braune に従い⁽⁶⁾, ein=jener bekannte と解し、《Streng genommen, ist ein hier nicht Artikel, hat seine Bedeutung auch nicht aus dem Artikelgebrauch, sondern aus dem Zahlwort (*der*

(3) 出典が示されていないが、これは *Parzival* 553, 11f. の引用で、この burc については、534, 20 以下 10 行にわたり詳細に述べられ、読者はよく知っているはずのものである。

(4) *Der arme Heinrich* 1060 f. すてに 255 以下で、サレルノの国手に、*«ir müeset haben eine maget ...»* と宣告された Heinrich が、かつて指図された通りの maget をつれてその名医を訪れたのである。

(5) L. E. Schmitt 教授による改訂版のシンタクスは O. Behaghel によっている。もっとも、Paul-Gierach 第 14 版(?) において、すてに Behaghel によるシンタクスの全面的書き換えが行われたらしい。Gierach による改訂版は第 12—14 版であるが、筆者は第 13 版 (1939) と第 14 版 (1944) は見ていない。

(6) § 225 Anm. に Sievers とあるのは Braune の誤りである。

eine=der bestimmte) entwickelt.》とその由来を説いているのである。

Braune の説を奉ずる文法書はほかにも少くない。たとえば V. Michels, *Mittelhochdeutsches Elementarbuch* (3. 4. Aufl. 1921) § 232; O. Mausser, *Mittelhochdeutsche Grammatik* (1933), S. 824; G. Eis, *Historische Laut- und Formenlehre des Mittelhochdeutschen* (1951), S. 120 などはいずれも ein に指示的な意味を認めている。相良教授と同様、Eis 教授も参考文献中に Paul-Gierach の第 12 版をあげ、ein についても Behaghel による修正には従っていないのである (Behaghel によるシンタクスの修正にはとかくの批判がある。たとえば Martin Joos-Frederick R. Whitesell, *Middle High German Courtly Reader*, 1950, p. 274 は、シンタクスが徒らに複雑化し、不分明になったことを批難し、修正前の第 12 版を推奨している)。また、中高ドイツ語のすぐれた入門書として定評のある J. Zupitza- F. Tschirch, *Einführung in das Studium des Mittelhochdeutschen* (16. Aufl. 1953)⁽⁷⁾ および F. Saran- B. Nagel, *Das Übersetzen aus dem Mittelhochdeutschen* (2. Aufl. 1953)⁽⁸⁾ は、ともに Paul-Schmitt (15. Aufl.) を最良の中高ドイツ文典として推奨しながら、ein については依然として Braune の説を支持しているのである。

しかし、Paul, *Mhd. Gramm.* の最新版、即ち W. Mitzka 教授による第 18 版 (1959) は、冠詞に関しては第 15 版と全く同じで (誤植までそのまま!)、Braune 説を認めない。

要するに、問題の ein の指示性については賛否両論が対立しているのが現状である。ein を指示的なものと見るかどうかによって、受け取り方がかなり変わってくることは言うまでもあるまい。とくに、問題の ein が文体上の特徴の一つになっている *Nibelungenlied* において

(7) Zupitza-Tschirch S. 48.

(8) Saran-Nagel, *Das Übersetzen aus dem Mhd.* に付けられた *Wörterbuch* (S. 149) は、いわゆる指示的な ein について、Braune の説そのままの解釈を採っているにもかかわらず、本文中では、例の *Der arme Heinrich* V. 1069 f. を (er hatte eine Jungfrau mitgebracht von der Beschaffenheit, wie er sie sich verschaffen sollte.) と訳して (S. 52)、Braune とは別個の見解を示している。

は、ein の問題はきわめて重要であると考えられる。私は Nibelungenlied のシンタクス研究の途上において、この障壁に突き当たった。そして ein に関する諸学説を再検討するの必要に迫られたのである。以下 ein をめぐる論争の歴史を辿り、最後にそれら学説の照明の下に、Nibelungenlied の問題の箇所を考えてみたいと思う。

2. Braune 説

前に述べたように、ein の指示代名詞的な用法を最初に提唱したのは Wilhelm Braune である。1886 年、彼は Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur XI に《Mhd. ein als Demonstrativpronomen》なる論文を発表し、つづいて同誌 XII, XIII において若干の補訂を行い、ここにいわゆる《指示的な ein》の学説を確立した。この提説が学界の注目を浴び、かなりの反響を呼んだことは、その後5年間にわたり、S. Bugge, F. Kauffmann, R. Hildebrand, L. Tobler, H. Möller によってこの問題が同誌で取りあげられ論議されたことから明らかである(註 2 参照)。もっとも Tobler の論文を除いて反論はなく、Bugge はすでに Heyne によって ags. *án* の指示的な意味が論証されていることを指摘し、Kauffmann はスイス方言辞典その他から同種の用例を引き、Möller は——Braune 宛の私信を Braune が公表したもの——ルター聖書から Braune の見落した一例をあげ、それが Tobler の解釈に不利であることを述べて、いずれも Braune を支持した。Hildebrand の見解が Braune とほぼ同じであることは、さきに引用した山田教授の紹介から十分察せられるであろう。Hildebrand は時を同じうして、Braune とは独立に《Vom deutschen Sprachunterricht》の中でこの ein を論じた。これに対して Braune は PBB. XXIII において、mhd. ein のこの用法を最初に正しく認識したのは Hildebrand であるとその功を師に譲っている。しかしわれわれは立論の規模と論述の徹底から、《指示的 ein》を Braune 説と呼ぶことにしたい。以下に Braune 論文の概要を紹介しよう。

まず Braune はふつうの不定冠詞とは截然と区別されるべき mhd. *ein* を Lachmann や Wackelnagel さえも正しく把握できなかったことを指摘する。即ちそれは Ahd. においてしばしば用いられた《*ein gewisser*》を意味する *ein*⁽⁹⁾に由来し、ags. *sum* と同じ意味の変遷を辿ったものである。話者にとって *bekannt* なものが、聴き手にとっても *bekannt* なものとして考えられるとき、《*ein gewisser*》は《*ein bekannter, jener*》の意味へ移行する。たとえば MF 16, 15—22⁽¹⁰⁾

Ich lac den winter eine.
 wol tröste mich **ein wip**
 diu mir fröide wolde kunden
 vür bluomen und vür sumerzit.
 daz nident merkære:
 des ist min herze wunt.
 ezn heile mir **ein frowe** mir ir minne,
 ezn wirdet niemer mê gesunt.

ここに第一の *ein wip* は《*eine gewisse Frau*》であり、これと同じ貴婦人をさす *ein frowe* は《*jene bestimmte Frau*》である。

Braune の推定によれば、このように不定代名詞から指示代名詞への意味が展開したのは、12 世紀以後のことである。即ち Ahd. には指示的 *ein* の用例は 1 例もなく、前期中高ドイツ語からも彼が蒐集しえたのは僅かに次の 2 例にすぎない。(Vorauer Alexander, Diemer 192, 2) Alexander begunde dô streichen **ein** (= *jenes vielbesprochene*) ros daz nie nichein man begunde weichen.—(Rolandslied 308, 17) Des gerte di edele herzoginne, **aines** richen chuniges barn. 後者は Paul-Gierach にも Eis にも引用されている

(9) Braune の引例: (Ludwigslied) *Einan* kuning ueeiz ih, Heizsit her Hiuduig, … (ただしテキストは F. Tschirch, Frühmittelalterliches Deutsch, 1955 による)。これを Braune は *teinen gewissen, bestimmten König kenne ich, …* と訳し、*teinen dem Redenden bekannten, als bestimmt vorschwebenden* と註している。

(10) これは Der Burggraf von Regensburg のミンネザング。引用は Carl von Kraus, Des Minnesangs Frühling (1950) による

から、少しく説明を加えておこう。di edele herzoginne というのは Lothar の娘で、バイエルン公 Heinrich の妃 Gertrud のことである。もちろんバイエルン在の詩人は、聴衆が彼女の素姓を知っているという前提のもとに語っているのである。とすれば aines richen chuniges は《eines mächtigen Königs》ではない⁽¹¹⁾。ein は定冠詞よりも更に強意の《des allbekannten mächtigen Königs》とでも解すべき ein である。

古典期に入ると、このような強意の ein は normal なものとなる。Braune はまず Parz. 442, 28—29⁽¹²⁾をあげる。

daz ungeverte im undervienc

ein slâ die er hete erkorn.

(Simrock 訳: daß bald im dichten Waldgehege *die* Spur verwand, die er erkorn.)

引例の前行 (442, 26) は

dô kêrte er ûf die niuwen slâ:

である。Parzival は Cundrie のあとを追った。ein slâ は彼の辿ったその Spur である。

そのほか、前出の Parz. 553, 11—12 (ein burc), Der arme Heinrich 1060 (eine maget) など数例⁽¹³⁾を引用し、この指示的な ein がとくに Nibelungenlied に多く見出されることを指摘して、次の箇所をあげている (A 本による)。

896, 1 ouch fuort er Balmungen, **ein** ziere wâfen breit (B

(11) E. Schröder が不定冠詞に抵抗を感じたのは当然である。vgl. Zeitschrift für deutsches Altertum XXVII, S. 81.

(12) ただし引用は A. Leitzmann 校訂本 (1947) による。

(13) Wigalois (ed. Pfeiffer) 36, 10:

von rehte muos ez (=das Kind) sælic sin
ez zôch *ein* richiu künegin unze zuo zwelf jâren.

この Königin についてはすでに十分知られている。

Walther 43, 29—30:

Wir wellen daz diu stætekeit
der wibes guete gar *ein* krône si.

(=der höchste Schmuck)

Walther 57, 23:

Minne diu hât einen site (=eine gewisse, eine bekannte Gewohnheit).

本 955, 1)

2287, 1 ouch vorht er Balmungen, **ein** wâfen starc genuoc.

(B 本 2350, 1)

この ein は、すでにしばしば述べた《かの名劍 Balmunc》を強調している。即ち ein=jenes bekannte である。同様、既知の人名のあとに並置せられた Apposition における ein も指示的意味を有する。例えば、992, 3 Uote ein edel wip (B: 1051); 332, 3 Kriemhilde ein küneginne hêr (B: 333) u. a. さらに注意すべきは写本のヴァリアンテである。

A B (括弧内はBの詩節番号)	C
379, 4 (391) Gunther, ein riter küene unde bald	der riter
451, 1 (482) ein schiffel	daz schiffel
2234, 3 (2297) ein starkez wâfen	daz st. w.
205, 2 (206) anz ende	an ein ende

Mhd. の写本においてしばしば同義語の交替が見られるように、上のヴァリアンテも強調度のつよい ein とやや弱い定冠詞との交替と見ることができる。従ってこのような ein を nhd. ein の立場から解釈するのは正しくない。ze einem trûte, ze einem herren hân; ze einem man, zeiner vrouwen nemen (=zum Manne, zur Frau nehmen) などの ein も強意の ein の観点からのみ理解しうるし、またたとえば⁽¹⁴⁾ genâde, ein küneginne!—sinc, ein guldin huon!—lache, ein rôsevarwer munt!—ein licht der cristenheit, Maria, aller magede ein lucerne! など Mhd. では Vokativ の前に ein が付せられることが珍らしくないが、これも強意的なものと考えべきで、du おきかえるともっともびったりする。lache, du rosi-ger Mund!—du Licht der Christenheit, Maria, du leuchte aller Jungfrauen!

(14) Vgl. Grimm, Wörterbuch III, 135.

このような ein の強調的用法の Nhd. における名残りとして, Braune は三つの場合をあげている。

- (1) ein+固有名: **ein** Lessing, **ein** Alexander etc.
- (2) **ein** hohes Ministerium, **eine** hohe Landesregierung, **ein** löblicher Magistrat etc.⁽¹⁵⁾
- (3) Luther 訳: Joh. 10, 12 Ich bin **ein** guter Hirte…(=*εγώ ειμι ό ποιμήν ό καλός*: Joh. 10, 14 Ich bin **ein** guter Hirte und ··Joh. 1, 21 Bist du **ein** Prophet? (=ό προφήτης ει σύ) Joh. 15, 1 Ich bin **ein** rechter Weinstock und mein Vater **ein** Weingärtner. (= *Εγώ ειμι ή άμπελος ή άληθειή, και ό πατήρ μου ο γεωργός έστιν*)

Braune の説明によれば, 通例《ein Mann wie Lessing》と解される ein Lessing は, 本源的には《jener bekannte, berühmte Lessing》を意味し, (2) は官庁, 官職に対する慣用的な儀礼的呼称で, 《die Eine, einzig in Betracht kommende Behörde, die jedermann kennt》という敬意をこめた表現である。(3) の ich bin ein guter Hirte usw. はギリシア語原典の定冠詞を ein で訳した点に注意すべきである。イエス自身自らを《der alleinige, bekannte gute Hirte》と呼んでいるのである。Luther がここに用いた ein は強意の ein である⁽¹⁶⁾。

以上が Braune 説の概要である。かように Braune は mhd. ein に既知の, 特定のものを強調する lat. *ille* に類似した用法を仮定した。

(15) Braune はこの場合つねに付加語形容詞と結合するに言うが, 形容詞を伴わない場合もある。Basler Urkb. VI. 6 (1409): an stat eis burgermeisters und eis ratz zuo Basel. vgl. Behagel, Deutsche Syntax I, S. 137.

(16) Luther 訳に従った現行の聖書ではすべて定冠詞を用い, der gute Hirte, der Prophet, der rechte Weinstock, der Weingärtner となっている (H. Strathmann 教授も定冠詞で訳している)。しかし H. Möller によって指摘された Luther 訳 Marc, 15, 21 Simon von Kyrene der ein Vater (τό πατέρα) war Alexandri und Rufi は現行聖書では定冠詞によって書き換えられていない (der ein Vater war des Alexander und Rufus) のはなぜであろうか。ただし J. Schniewind 教授は定冠詞で訳している。vgl. Das Neue Testament Deutsch, Neues Göttinger Bibelwerk, 1 (1952), 4 (1951).

これに対してまず Edward Schröder は、近代の民謡の中にもなお同種の *ein* が残存していることを Uhland, Liliencron から引用して Braune を支持した⁽¹⁷⁾。次いで ags. *án* の同じ用法について Cosijn および Bugge の示教があり、また Kauffmann も Idiotikon から類例を選び出して Braune に賛意を表した。Braune 自身も A. Beets, *een als Pronomen demonstrativum* によって mnl. *een* に同様の用法のあることを知り、かつ Hildebrand が時を同じうして奇しくも同じ見解を發表したので、Tobler の異説にもかかわらず一層自説に対する確信を深めることができたと思われる。

3. Hildebrand の第 3 および第 4 の *ein*

前述のごとく Rudolf Hildebrand の *ein* についての見解は《Vom deutschen Sprachunterricht》(1887) S. 230 f. に見られる。Hildebrand に *ein* に関する考察の契機を与えたのは例の《ein hohes Ministerium》の *ein* に対する抵抗感であったと彼は告白している。Hildebrand はこれを《das eine Ministerium, das es im Lande gibt》と解し、音の上ではすでにアクセントを失っているが、元来は数詞であると考え。そして早くから mhd. *ein* の強意的な用法に注目して、これを数詞、不定代名詞に対して《第 3 の *ein*》と呼び、元来は数詞で、《*einzig*》の意味をもつと考える。Braune も最初の論文では指示的 *ein* を直接数詞に結びつけて考えたが (PBB. XI, S. 518)、のち直接には不定代名詞に由来すると訂正した (PBB. XII, S. 393)。この点が両者の見解の相違である。更に Hildebrand は《*viertes ein*》と呼ぶべき *ein* があると主張する。《第 4 の *ein*》とは次のような *ein* である。

Walther 10, 1—4

Mehtiger got, dû bist sô lanc und bist sô breit,
gedæht wir dâ nâch daz wir unser arebeit
verlûren ! dir sint ungemezzen maht und êwekeit.
ich weiz bî mir wol daz *ein ander* ouch dar umbe trahetet :

(17) Vgl. PBB. XII, S. 393 Anm.

...

この ein ander は《ein anderer, bestimmter》ではなく、《mancher andere》、あるいはもっと強意の《der und jener andere》で、元来複数の意味するものであって、《第 3 の ein》とは対照的である。それは Nhd. の《einer und der andere》を想起せしめる。更に

Walther 103, 37 ff.

ich und *ein ander* tôre
wir doenen in sîn ôre,
daz nie kein mûnch ze kôre
sô sêre mê geschrei.

Walther 53, 31 f.

ein ander weiz die sînen wol:
die lob er âne mînen zorn;

...

この ein ander は《jeder einzelne andere, die andern außer mir》、つまり《alle》であるが、Walther は特定の何人かを頭においていたに違いない。即ち《der und jener》を意味する。次のような ander のない場合も同様である。

Walther 6, 28 f.

Nû sende uns, vater unde sun, den rehten geist her abe,
daz er mit siner sîezen fiuchte *ein* dîrrez herze erlabe.

この ein dîrrez herze も《die dîrren Herzen》の意であるが、表現および表象の上では個別的に《eins und das andere》が考えられている。Hildebrand はさらに古典ギリシア語、ラテン語による傍証を試みているが、われわれの関心は彼のいわゆる《第 3 の ein》にあるので、これ以上《第 4 の ein》には立ち入らないことにしたい。

4. Tobler の批判

Ludwig Tobler は論文《Nachträgliche Bemerkungen über mhd. EIN》(PBB. XV, S. 380 ff.)において、Braune 説を鋭く批判してい

る。彼はまず Kauffmann によって提供された引例の不当を一々指摘し、次に鋭鋒を Hildebrand に向けている。問題の *ein* の用法に最初に注目した功は Hildebrand にあるにしても、それが直接数詞に由来するとなす解釈が Braune によって棄てられたのは正しいと Braune に軍配をあげている。そして《第 4 の *ein*》、いや《第 3 の *ein*》さえもが、《第 2 の *ein*》即ち不定代名詞の特殊な用法にすぎないのであるから、その設定の十分なる根拠を認め難いという。Tobler によれば第 3 も第 4 も《第 2 の *ein*》の下に包摂されうるのである。彼は Braune 説がすべての場合に適合するとは限らない点をつき、不定の *ein* から限定的な *ein* (= *jener*) への移行も説明されていず、ただ仮定されたにすぎないと述べ、もっと厳密に *ein* を識別解釈しようと試みている。

まず彼は *ein+der* という特異な結合形式を取りあげる。この形式についてはすでに J. Grimm (*Deutsche Grammatik* IV, 453) がつねにあとに関係文を伴い（関係文の欠けている場合は想念の中で補われねばならない）、かつ多く形容詞の最高級の前に置かれることに注目し、不定冠詞と定冠詞の併用による意味の強調を説いている。

Nib. 132, 3

und ouch in **ein diu** frouwe die er noh nie gesach.

Iwein 334 an **ein daz** schoeneste gras

daz diu wert ie gewan.

Tobler は、後続の関係文によって名詞の特性はよりくわしく限定せられるがゆえに、先行の *ein* は *rückweisend* に *jener* の意ではありえないと考え、それはふつうの不定代名詞であって、二つの文形式の混合ないし重なり合いと解釈する。即ち *ein* または *der* の一方だけで十分であるが、両者併用によって強調せられるというのである。

ein der beste (Nib. 1217, 2 *ein der aller beste, der ie küneges lant*; 1233, 4 *jâ verlôs ich in den besten, den ie vrouwe gewan.*) は決して nhd. 《*einer der besten*》ではなく、まさに《*der beste*》であり、また Grimm のように *ein min wange* (= *die eine meiner Wan-*

gen) に比するのでも正しくない。後者の *ein* は数詞であって、不定代名詞ではない。即ち *ein diu frouwe* は《*eine und zwar die, welche...*》であり、*ein der beste* は《*einer und zwar der beste*》を意味する。このような分析にあたって Flore 3554 *ichn weiz wer ein maget wære, diu schænest die ich ie gesach.* は示唆的である。ここでは *Attribut* (*ein diu schænest, die...*) の代りに *Apposition* が選ばれている。

ein 単独の場合でこの用法にもっとも近いのは、*Minnesänger* にときどき見られる *ein frouwe, ein wîp*——意中の親しい婦人に対して *ein* を冠した用法である。

Walther 73, 1

mich enwil **ein** wîp niht an gesehen:
die brâht ich in die werdekeit

なおさきに第 2 章で引用した MF. 16, 21 参照。

このような *ein* について Tobler は、その婦人自身に対する顧慮から親しくないように見せるためか、あるいは実際に婦人が騎士に対していく分疎遠になっていたと解する。

Hildebrand が取りあげた *ein ander* については、《*ein ganz beliebiger anderer*》でも、《*ein ganz bestimmter anderer*》でもなく、表現の不定性は主観的連想によって限定されていると説く。

Walther 46, 32

Aller werdekeit **ein** füegerinne,
daz sît ir zewære, frowe Mâze.

Walther 43, 29

Wir wellen daz diu stætekeit
der wîbes güete gar **ein** krône sî.

Walther 19, 5

Ez gienc, **eins** tages als unser hêrre wart geborn
von einer maget dier im ze muoter hât erkorn.

前二者と後者とは少し異なるが、これらの *ein* はいずれも定冠詞で置き

かえることができよう。しかし *der* で訳す必要もなければ、それが正当でもない。ごくふつうの *ein* である。即ち Walther 43, 30 は《*Stätigkeit ist eine die weibliche Tugenden krönende Zugabe*》であり、19, 5 の *ein* は続く付加語文によって直ちに特定なものへ移行するから、不定の *ein* で十分である。前述の *ein+der+関係文* の場合と同様、ここでも *ein* を数詞 (= *einzig* の意) と考える必要はない。

次に Luther 訳 Joh. 10, 11 《*Ich bin ein guter Hirte.*》については、これを指示的 *ein* と見る論拠は薄弱である。すでに Luther 以前の翻訳 Grieshaber, Predigten 1, 7 にも *ich bin ein guoter hirte* とある。これもやはり強意の *ein* であるかどうか。なぜなら原拠であるラテン語訳 *pastor bonus* を訳すには、*ein* でも *der* でもいずれをも選ぶうる。ラテン語に冠詞がないから、前後関係によって *ein* か *der* かをきめなければならない。Tobler は、Luther 訳においても、また Grieshaber 訳においてもともに *ein* は強意のものではなく、不定代名詞と見るべきだと主張している⁽¹⁸⁾。

Tobler によれば、同時代のものである官庁文体 *eine hohe Obrigkeit*, *ein Magdeburgisch Recht*, (形容詞なしに:) *ein Eidgenößschaft*, *ein Reich (das deutsche)* などの *ein* は、*Minnesänger* が特定の貴婦人に対して *ein frouwe* を用いたと同じ理由によるもので、畏敬ないし儀礼から高位の人物や官庁を話者から敬して遠ざけようとする気持が *ein* を選ばしめた。あるいは第二の解釈として、《*die Obrigkeit, die eine hohe genannt*》, 《*ein Reich wie das deutsche*》と説明している⁽¹⁹⁾。

かの固有名に付せられた *ein* は、Tobler によれば上のような官庁文体の機械的な模倣としてのみ説明しうるのである。

最後に問題の mhd. *ein* のもっとも多い用法、即ち叙事詩の中の既知

(18) Luther が原典と同じように定冠詞を選ばなかった理由として、Tobler は《*weil der bestimmte Artikel ihm in jenen beiden Fällen zu stark vorkam, da ja doch (besonders beim Weinstock) keine wirkliche Identität, sondern nur eine bildliche Ähnlichkeit ausgesprochen werden sollte.*》と述べている。

(19) 同様にさきの Luther 訳も《*ich bin der Hirte, der (in Wahrheit) ein guter genannt werden kann od. muß.*》と解することもできると Tobler は述べている。

の人物に、あたかもはじめての人物であるかのように ein つきの Apposition が付せられたり、既に述べられた物のちに ein を冠して再び引用されたりする用法について、Tobler はそれが英雄叙事詩、とくに Nibelungenlied にもっとも多いことを重視している。そして英雄叙事詩と関係の深い詩人、たとえば Wolfram のような宮廷詩人によってこの用法が騎士叙事詩に移植された、と考える。つまり英雄叙事詩が小歌謡の集積として除々に成立したこと、またそれが大きな伝説圏の断片として吟誦せられたという前提に立ってはじめてこの用法は説明がつくと述べている。(当時は一般に Lachmann の歌謡集積説が有力であったが、勿論今日においては歌謡説は支持されないから、Tobler のこの仮定は根柢を失うわけである。) 詩の題材は広く知れわたったものであったが、聴衆はしかし、人物や事件を一様に完全に知っていたわけではない。従って断片を朗吟する詩人は、それらを新しく紹介したり、あるいは少くとも思い出させる必要があった。かくて Apposition に ein がつくという形式が生じたのである。しかし叙事詩が断片としてではなく、一連の全体として広く知れわたり、完全な一個の詩として読者の前にあらわれたとき、ein は指示的な意味に傾くことも可能であった。そしてやがてこの表現が固定して、騎士叙事詩のスタイルの中へまで入り込むことになったのだと Tobler は推定するのである。

要するに Tobler は多彩な mhd. ein の用法が本源的にはすべて不定代名詞(不定冠詞と言ってもよい)に帰一することを主張し、しかも《nicht im Widerspruch mit Braune, aber in einer seine Aufstellungen ergänzenden Weise》と付言しているのである。

5. Braune 説に対する Paul の態度

Braune とともに《Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur》の創始者であり、(従って Pauls und Braunes Beiträge または PBB. と略称)、青年ドイツ文法派の代表的理論家であり、かつ Mhd. のすぐれた理解者であった Hermann Paul が問題

の ein についてどのような見解をもっていたか、われわれの知りたいところであるが、残念ながら詳かでない。彼の《Mhd. Grammatik》は、Mhd. の文典のもっとも代表的なものであるが、私の知る限り少くとも第 5 版（1900 年）までは、この問題について何も触れていない。同書は Paul の生前に 11 度版を重ねたけれども、おそらく ein の指示性は採り入れなかったのではなかろうか（残念ながら第 6—11 版は筆者未見）。というのは彼の大著《Deutsche Grammatik》第 3 巻（1919）164 頁に《Braune, PBB. 11, 518, dessen Auffassung aber schwerlich richtig ist. Auch seine Ausführungen über ältern mhd. Gebrauch scheinen mir nicht zutreffend.》と Braune 説に対する不満が洩らされているからである。しかしそれ以上積極的な発言はないので、憶測を出ないのであるが、Paul は問題の ein を単なる不定冠詞と見ていたのではなかろうか。Paul の死後、彼の意志に反して《Mhd. Grammatik》の改訂者は Braune 説を採用した（Paul-Gierach, 12. Aufl.）。しかもその後 Behaghel によってシンタクスが全面的に修訂せられるに及び、Behaghel の説が Braune 説にとって代り、さらに v. Kraus の解釈も採り入れられて、今日に及んでいることは前述の通りである。

6. Behaghel の反論

Otto Behaghel の mhd. ein に関する見解は、彼の《Deutsche Syntax》第 1 巻（1923）の冠詞篇に示されている。彼は一部は Tobler に従い、一部は彼独自の解釈を展開させながら、ein のいわゆる指示代名詞的用法を全面的に否定している。引例の大部分において Mhd. の語法上 jener が当らないからというのではなく、強調がわざとらしい場合がかなり多いというのが反論の理由である。そして Mhd. においては Prädikat における不定冠詞の用法がきわめて広範囲にわたっているという事実が、正しく理解されていないことを指摘している（同書 S. 87 ff. 参照）。

例：Parz. 140, 25 *din vater was ein Anschevin.*

Nib. 1675 *ob ich ein fürste wære.*

Parz. 358, 13 *sît dû gihs er sî ein koufman.*

Nib 109, 1 *ich bin ouch ein recke.*

Nib. 1746, 3 *ir sît ein künegîn.*

Iw. 4072 *ich bin leider ein wîp.*

Nib. 2319, 4 *ich was ein künec hêre.*

Iw. 2945 *unde lat ditz vingerlîn
ein geziuc der rede sîn.*

Behaghel によれば、既知の人物の Apposition に付せられた ein は Prädikat における上の用法に由来する。例えば Nib. 333, 3 *die scène Kriemhilde, ein küneginne hêr.*—750, 2 *dô sprach der marcgrâve Gêre, ein reke vil guot.*

とくに一人称代名詞の Apposition と結びついた ein, 例えば Friedbg. Urkb. 70 *wir Henrich von Paffwung, ein burggrâve* の ein には強調的役割など考えようもないと Behaghel は言う (a. a. O. S. 135).

また Mhd. においては ze と不定冠詞が結合することがきわめて多かった (a. a. O. S. 83 ff.). Nib. 42, 3 *daz si den jungen wolden ze eime herren hân.* や *zeinem man, zeiner vrouwen nemen* などの不定冠詞は ze の prädikativ な機能から考えて、当然 Prädikat における不定冠詞 ein と同種のものでなければならない。

Vokativ における ein も Behaghel によれば、Prädikat における用法に由来する (a. a. O. S. 72 ff.). 例えば Myst. I, 263, 3 *O mîn lieber herre Jesu Kriste, ein fürst unmeziger rîlicheit, ein zimmermann aller der werlte.* はまた *O mîn lieber herre Jesu Kriste, du bist ein fürste unmeziger rîlicheit, ein zimmermann aller der werlte.* とも言うことができた。同様 Apposition を伴わない場合も、たとえば Wolfd. 68, 1 の *aller manne ein wünne, du solt wilkomen sîn.* は *du solt wilkomen sîn, du bist aller manne ein wünne.* と言うこともできた。Behaghel はこの両形式を、前者即ち不定冠詞+Vokativ は、後者即ち Prädikat における用法に由来する

と説明する。しかしこの説明がすべての例を満足させることはできないので、彼はアナロジーによって解決しようとするのである⁽²⁰⁾。

次にわれわれが定冠詞を期待するところにあられた *ein* が、関係文を伴う場合については、次のように二つの思考の重なり合いとして説明する。

Iw. 6450 und ich wæne wol, si was sin wip, **ein vrouwe**
diu dâ vor im saz.=vor ihm saß *eine Frau*, die war sein
Weib+*die Frau*, die vor ihm, saß, war sein Weib.

Pz. 500, 24 wer was **ein maget** diu den grâl trouc? ir mantel
lêch man mir.=*eine Jungfrau* lieb mir ihren Mantel; die
trug den Gral+wer war *die Jungfrau*, die ..

さきに Tobler が二つの文形式の混合ないし重なり合いと説明した両冠詞の結合形 *ein+der* については、Behaghel は S. 137 f. に関係文が後続する場合としない場合とに二類別し、前者をさらに先行詞が形容詞の最高級によって規定される場合と付加語を欠く場合とに分けて例をあげ (Berth. I, 84, 4 **ein der** aller liebste kneht den er iendert hat; Lanz. 2492 sô bin ich **ein der** man, der sich iu nennet âne schame; Kudr. 8, 3 er hiez im werben **eine die** besten von den richen), いずれも次のような混合の結果生じた用法と説明している。

ein der liebste=*ein der liebsten+der liebste*

ein der man der=*ein man, der+der man der*.

なお Kudr. 8, 3 については《werben eine, die besten v. d. r.》と解釈することもできようと言言している。

さて最後に、Braune が指示的 *ein* の名残りとして指摘した《ich bin ein guter Hirte》, 《ein Lessing》, 《ein hohes Ministerium》における *ein* に対する Behaghel の見解はどうであろう。

(20) Behaghel, a. a. O. S. 75: (nachdem einmal der der Typus geschaffen, entstehen Nachbildungen.) 更に彼は次の如く言う。 (Bei dieser Art des Entstehens be- greift sich auch die zeitliche Begrenzung, die mit der Verwendung des *ein* im Prädikat sich ungefähr deckt.)

Luther 訳《Ich bin ein guter Hirte.》は er ist ein guter Bürger, ein beliebter Professor, ein tapferer Soldat, ein zuverlässiger Beamter などと全く同じ ein で、《woran gar nichts Merkwürdiges ist》と述べている (S. 93).

ein+固有名については、固有名が普通名詞的意味に近づくとき、固有名に不定冠詞を付置しうるとなし、そこから軽蔑的なあるいは称賛の意味をこめて ein を付加する可能性も生ずると述べている (S. 50 Anm. および S. 416 参照).

また官用語に残った ein については、官庁名や官職名に添えられた Apposition における ein か、または ze einem rate, ze einem schultheizen kiesen のような ze を伴った prädikativ な表現に由来するものと見ている (S. 137).

以上、Behaghel は問題の ein の指示性を全面的に拒否している。Tobler は用法の多様さにもかかわらず、問題の ein が本源的には unbestimmtes Pronomen に帰一することを強調するが、ein の強意的役割についてはこれを否定しない。しかし Behaghel はあくまでも ein は単なる不定冠詞にすぎないと主張し、強調的な意味を認めないのである (S. 135).

7. Carl von Kraus 説

Tobler につぐ Behaghel の Braune 説批判 (1923) も、しかし一般には承認せられなかった。そしてもっとも代表的な中高ドイツ語文典である Paul, Mhd. Grammatik も第 12 版 (1929 年) において全面的に Braune 説を採用するに至って、いわゆる《demonstratives ein》はほとんど定説となるかに見えたが、1930 年、中世抒情詩研究の上に輝かしい業績をたてたかの Carl von Kraus が、Zeitschrift für deutsches Altertum LXVII においてこの問題をとりあげ、Behaghel に左袒しながら更にテーマを深く掘り下げ、精緻な論を展開した。以下、彼の論文《Das sog. demonstrative EIN im Mittel-

hochdeutschen》の概要を紹介しよう。

v. Kraus は Braune をはじめ諸家の引例を次の三つのグループに大別する。

- I. 一個体をその種属から herausheben する場合,
- II. ein+der
- III. nhd. der に対応する ein

I. 第一のグループの共通性は、話者が個々の人または物をその種属の中から herausheben しようという意図をもっている点にある。この意図のために不定冠詞が用いられているのである。v. Kraus は更に四つに分類して説明する。(表題は便宜上筆者がつけた)

(1) 述語名詞と ein

これは Nhd. においてもごくふつうの用法であるから、多く説明は要しまい。Michael ist ein hehrer Engel. における不定冠詞である。Braune や Hildebrand が指示的な意味を読みとろうとしたかの有名な引例、《Ich bin ein guter Hirte》(Joh. 10, 12)⁽²¹⁾や《Simon von Kyrene…der ein Vater war Alexandri und Ruffi》(Marc. 15, 21) はこれに属する。ein Vater という場合、Luther は《Sohn》とか《Enkel》というカテゴリーと区別して、《Vater》というカテゴリーを考え、このカテゴリーの一員として《ein Vater》と言っているのである。これに対してわれわれは定冠詞を用い《der der Vater Alexanders war》と言う。この場合《der Vater》は Alexander の父その人について言われる。つまりわれわれはカテゴリーを考えず、特定の個人を考えるのである。zeinem mane, zeiner vrowen nemen の不定冠詞も同様カテゴリーが考えられているのである。

(2) Vokativ と ein

Got der sprach dô einem sînem holden zuo Michael, ein engil hêr, vernim wie mîn holde Luzifer…(Gen. K I, 28 f.); genâde, ein

(21) Tobler の説明(註18)に対して v. Kraus は《unklar und gezwungen》と評している。

küeneinne ! (Walth. 118, 29) ここで呼びかけられているものは engil なる種属中の ein engil であり, また künniginne なる種属の一員と同一視されるのである. ein kreftic got Jupiter, waz woltestu min (Parz. 810, 27) も神々の中の ein got である⁽²²⁾.

要するに Prädikat における ein と全く同種の ein であるが⁽²³⁾, 問題は Nhd. において Vokativ の ein の用法が何故に廃れたかである.

(3) 固有名と ein

これについては v. Kraus は Behaghel の見解に全幅の同感を表明している. そして eine hohe Obrigkeit 等の官用語形式の機械的な模倣となす Tobler の説明に対しては《nicht so einleuchtend wie von Behaghel》と評している.

(4) Minnesänger の ein

Minnesänger が意中の貴婦人に対して用いている ein に関しても, v. Kraus は Braune や Tobler と見解を異にする.

Wolfram, Lied 5, 16 **Ein wip** mac wol erlouben mir, daz
ich ir neme mit triuwen war.

Her Meinloh von Sevelingen⁽²⁴⁾, 13, 1 Ich bin holt **einer**
frouwen: ich weiz vil wol umbe waz.

Kürnberc, 9, 31 wan ich muoz **einer frouwen** rûmen diu
lant.

Walth. 73, 1 mich enwil **ein wip** niht an gesehen:
die brâht ich in die werdekeit.

これらを Braune 流に《eine gewisse Frau》と訳せば 誤訳となるで

(22) Behaghel が前掲書 S. 74 にこの例と並べて引用している owi einvaldige trinitas, ein gewaldiger got (Lit. 173) の got は唯一神であるから, ein は数詞と解すべきである.

(23) Behaghel は前述のごとく, Vokativ における ein を Prädikat における用法に由来すると説明した. これに対して v. Kraus は, この両方の用法は Mhd. においては全く同じもので, 一方が他に由来するという関係のものではなく, Nhd. において Prädikat における ein だけが残り, Vokativ における用法が失われたと考える. これによって註 (20) の後半に Behaghel の指摘した事実を納得しうるのみならず, Behaghel のようにアナロジーの助けを借りずとも, 無理なくすべての用例について説明がつかうのである.

(24) v. Kraus が詩人を Regensburger としているのは誤りであろう.

あろう。むしろ《eine ungewisse Frau》が正しい。近代詩人の用いる《sie》が最も適訳である。わが恋人は聴衆には無縁である。だから Minnesänger は彼女を《ein wip》と呼ぶのである。もちろんもっとはっきりとこれを指示する必要があるれば定冠詞が用いられる。Her Meinloh von Sevelingenは上に引用した詩節を《und wurde ich danne lebende, so wurde ich aber umb daz wip.》と結んでいる⁽²⁵⁾。

II. ein+der

第二のグループは思考の二重性のために ein+der という二重表現がとられる場合である。v. Kraus は形容詞の最高級を伴う場合と伴わない場合とに分けて考察する。

(1) 形容詞の最高級を伴う場合

たとえば《**ein der** hertiste strit, der vordes oder sit ergie》(Greg. 1983⁽²⁶⁾)には、《daß es *ein* Kampf war》と《daß es *der* härteste Kampf war, der je vor sich ging》の二つの思想が同時に表現されている。即ち ein は Kampf に、der は最高級に関係するものである⁽²⁷⁾。Nhd. は ein を放棄し、最高級によって要求せられる der だけを冠置するのである。また《er hiez im werben **eine die** pesten (sc. *maget*) von den richen: diu saz in Norwæge.》(Küdr. 8, 3)のように稀に名詞を欠く場合があるが、これは 7, 1 の《Sin muoter riet dem richen daz er im næme ein wip.》から推して、当然、eine die pesten のあとに maget を補って考えるべきものである。

このような ein+der を二つの文形式の混合なしに重なり合いと考えた Tobler は、ein あるいは der の一方だけでも表現しえたと説明

(25) Braune が《ein gewisser》から《jener bestimmte》への移行を示すものとして引用した Regensb. 16,16f. (ein wip, ein frowe) は、前後関係で同一性が余りにも明白であるので、不定冠詞で押し通したと v. Kraus は解釈する。

(26) これは Tobler によっても引用されているものであるが、定本 (2155) によれば、ein der hertiste strit ではなく、単に der hertiste strit である。さきに Tobler 論文の紹介にあたっては、この引例を避けたが、しかし v. Kraus はこの 1 例によって彼の解釈を示しているの、やむなくこれを用いる。

(27) Flore 3554 ich enweiz wer *ein maget* wære, *diu schöneste* die ich ie gesach. は v. Kraus の解釈に対してきわめて示唆的である。

しているが、《ein だけでも》というのは正しくないであろう。v. Kraus は Tobler の解釈を《nicht ganz klar》と評し、また Behaghel の分析、即ち ein der liebste=ein der liebten+der liebste に対しては、《ein der beste は断じて einer der besten ではなく、正に der beste を意味する》という Tobler の見解に賛意を表している。

(2) 最高級を伴わない場合

v. Kraus は Lanz. 2492 sô bin ich ein der man, der…を ein der man der=ein man der+der man der と説明した Behaghel を支持する。

Nib. 132,2 ff. er truog in sime sinne ein minnecliche meit, und ouch in ein diu frouwe die er noh nie gesach, diu im in heimliche vil dicke gütlichen sprach. は er liebte das Mädchen und auch ihn die Dame (diu frouwe)+ihn liebte eine Dame (ein frouwe), die er noch nie erblickt hatte と分析される。二つの思想が二種の冠詞で表現されているのである⁽²⁸⁾。しかし、Nhd. でも《Ich bin ein Pechvogel (od. der Pechvogel), dem alles schief geht.》と云いうるように、前掲の引例は Nhd. で《Ihn liebte die Dame, eine Dame, die er noch nie erblickt hatte.》というのと全く同じ表現である。

ein min friunt, ein sin mac, ein min niuwer man 等もつとに Lachmann が指摘したように⁽²⁹⁾、ein Freund+mein Freund の二重表現と見られる⁽³⁰⁾。

III. nhd. der に対応する ein

第三のグループは第二のグループと同様、A と B という思考の二重性をもつものであるが、第二のグループがこれを ein+der という二重形式で表現したのに対して、ここでは形式上は単一の表現、即ち

(28) Nib. 132, 3 の ein を in につけ、eine (=allein) の意に解する Lachmann や Piper の註は一般に支持されない。

(29) Vgl. Kleine Schriften I, S. 254.

(30) v. Kraus は ein min wange の ein を数詞と見る Tobler の解釈は誤りであるとしている。

思考 A は ein により, 思考 B は der による表現をとる. この場合 Mhd. ではしばしば B が脱落し, A だけによって表現せられ, Mhd. では逆の表現法がとられるのである. mhd. ein が Nhd. 的語感にしばしば奇異に響くのは, このような表現法の差異に基づくものである. v. Kraus はこのような mhd. ein を下記のように細分して説明する (分類の表題は便宜上筆者がつけた).

1. Apposition と ein
2. 官庁・官職名と ein
3. 関係文と ein
4. 文脈により同一性が明瞭である場合
5. 文脈により既述性が重要でない場合
6. 英雄叙事詩の ein

(1) Apposition と ein

Exod. 2004 si giengen zuo Pharaône, **zeinem** chunige vil hêre. Pharao についてはすでに語られている. もちろん Nhd. においては Apposition (zeinem chunige) は定冠詞をとる. この場合の mhd. ein を v. Kraus は付加語形容詞の新しさに結びつけて考えている. 上例では hêre という形容詞が問題である. 王は《hêre》によって新しく性格づけられている. その新しさと ein は結びついているのである. 名詞の既知性と形容詞の新しさを表現の上に出そうとすれば, さしずめ《sie gingen zum König Pharao, der *ein* übermütiger König war》と言わねばなるまい. Nib. 333, 2 die scœnen kriemhilde, **ein** küeginne hêr; 391, 4 Gunther, **ein** ritter küene unde balt; 1476, 1 der küene Volkêr, **ein** edel spilman などの ein は novum による不定冠詞である. とくに Nib. 1476, 1 はこの解釈の正しさを証するものであると v. Kraus は言う. 詩人は次の詩節を下のように続けている.

Wer der Volkêr wære, daz wil ich iuch wizzen lân.
er was **ein** edel herre. im was ouch undertân
vil der guoten recken in Burgonden lant.

durch daz er videlen konde, was er **der** spilman genannt. edel herre は不定冠詞と, spilman は定冠詞と結びついている. v. Kraus によれば, これは novum の観点からのみ解決のつく問題で, この不定冠詞を Braune のように《jener bekannte》と解するのは誤りである. また Behaghel の解釈もすべての例を説明することはできない. たとえば Nib. 955, 1 Dô fuort' er Balmungen, ein ziere wâfen breit. は Behaghel の解釈に従えば, 《Er trug Balmung, der eine schmucke breite Waffe war.》となる. しかしすでに語られた Balmunc に不定冠詞が用いられるのは《befremdlich》だと v. Kraus を言う. 不定冠詞が用いられていることだけでなく, 定冠詞が用いられなかった理由も説明されなければならない. Behaghel にはその説明が欠けている.

(2) 官庁・官職名と ein⁽³¹⁾

Basler Urkb. VI, 6 (1409) 《an stat eis burgermeisters und eis ratz zuo Basel》とか, 古い Nhd. の公文書の上書に見られる《an ein hohes Bayrische Ministerium der Finanzen》などにおける ein については, v. Kraus は多くの Bürgermeister, Räte, Ministerien の中から個々の役所や役人を区別する不定冠詞であると考え. これに対して, 最初から *der* Basler Bürgermeister und Rat や *das* Bayrische Finazministerium が考えられる場合には定冠詞が選ばれるのである.

(3) 関係文と ein

Alexander begunde dô streichen **ein** ros daz nie nichein man begunde weichen. これはしばしば引用された例であるが, ein ros は前に述べられた Bucephalus であること, そしてまたそれがいまだ何人にも制御されない驃馬であったという二つのことを表現しようとするならば, 前者には定冠詞, 後者には不定冠詞が必要であろう. 即ち

(31) 用例については Grimm, Deutsche Grammatik IV, 424 および Behaghel, a. a. O. S. 137 を見よ.

《Er begann das Roß zu streichen, ein Roß, das bisher niemand hatte zähmen können.》となる。つまり ein daz ros daz…である。しかし前後関係から、この馬が前述の Bucephalus と同じ馬であることは疑うべくもなく明らかであるから、daz による同一化を断念して、ein だけで満足している。Nhd. でも《und hiemit streichelte Alexander ein Roß, das zuvor niemand hatte zähmen können.》ということができよう。armer Heinrich 1060 er hete brâht **eine** maget die er in gewinnen hiez (=eine Jungfrau, die……) も Iwein 6450 ich wæne wol, si was sîn wîp, **ein** vrouwe diu dâ vor im saz; Parz. 442, 28 daz ungeverte im undervienc **eine** slâ die er het erkorn: sus wart aber der grâl verlorn (=das Gestrüpp entzog ihm eine Spur, die Spur die er wahrgenommen hatte); 500, 24 wer was **ein** maget, diu den grâl truoc? ir mantel lêch man mir an (=wer war eine Jungfrau, die Jungfrau, die den Gral trug?); 553, 11 er kôs **ein** burc diers âbends sach. などすべて同じように解釈できる。最後の例についていえば、彼はまず eine Burg を認める。しかるのちはじめて、それがすでに昨宵見た die Burg であることが伝えられるのである。Parz. 455, 25; 605, 15; 649, 5 などみな同種の用例である。

v. Kraus の解釈は Behaghel のそれと本質的には同じであるが、もっと einfach である。すぐあとに続く関係文によってくわしく規定されるから、定冠詞は不要だというのである。だから、関係文の先行詞が全く冠詞を欠くことさえあるのである⁽³²⁾。

Parz. 664, 22 Artûs her ouch wider galt *market*, den man in dâ bôt; Wileh. 81, 24 ê daz er von im selben zôch *harnasch*, daz er ê het an.

(32) Vgl. F. Zimmert, Das artikellose Substantivum in den Predigten Bertholds von Regensburg (PBB. XXVI, S. 366): dâ von hânt die tiuvel den alten liuten *strie* geleit, den nieman gebrechen mac (486, 12); dar umbe sult ir tugende hant an haben, diu dâ heizet demüetiket (476, 30). その他 Paul-Mitzka, Mhd. Gr. §223e: Behaghel, Dt. Syntax I, S. 122 f. 参照。

かように定冠詞が放棄され、不定冠詞だけが用いられることにより、読者や聴き手に対しては何の顧慮も払われず、ただ目の事象だけが描写されることになるのである。Nib. 708, 3 unz daz si kômen **zeiner** bürge wit, diu was geheizen Santen.=bis sie zu *einer* Burg kamen, *der* Burg, die Santen hieß. 勇士たちは *eine* Burg へやって来た。ここでは読者や聴き手のことを顧慮することなく叙述せられており、続く関係文によってはじめて、読者や聴き手にそれが *die* Burg Santen であることが伝えられるのである。後述の(6)にこれと類似の用例がある。

(4) 文脈により同一性が明瞭である場合

前項の諸例は、関係文によって十分規定せられるから、定冠詞を欠くことができたが、前後関係から前に述べられた語との同一性が明らかなので定冠詞が不要になる場合がある。たとえば《So ritten sie denn den ganzen Tag: abends rasteten sie.》という文章の abends はもちろん *am* Abend と置き換えることができる。しかし文脈から、それが《その日の夕方》であることは明瞭であるから、定冠詞は不要である。このような場合 Mhd. ではしばしば不定冠詞が用いられる。

Nib. 507, 1 An **einem** morgen fruo huoben si sich dan.

この朝が《ある朝》ではなく宴の《あくる朝》であることは、504 節の《ir sult von hinnen mit mir über fluot.》という Sivrit の言葉からも明らかである。Nib. 804, 1 の an **einem** âbende, dâ der künec saz も 802 に《der wirt dô ze tische mit sinen gesten saz》とあるから、Nhd. で《abends》と訳しても誤解のおそれはない。

Parz. 135, 6 ich hân dicke pris bezalt und manegen ritter ab gevalt. des enmoht ich nu geniezen nicht: **ein** hôhez laster mir des giht.

この laster も、文の脈絡から明瞭であるから、《*diesen* schweren Schimpf》と訳すのは *überflüssig* で、《jetzt habe ich *ernen* schweren Schimpf erlitten, der mir zeigt, daß alle meine Taten umsonst waren》と不定冠詞で訳すことができると v. Kraus は述べている。

Gen. K(Diemer 13, 15) で《sage mir durch dine guote, durch waz dirz got verbute?》というアダムに対する悪魔の問いにつづいて、《Swie sin uragete **ein** ubil hunt, idoch waz ez im wol chunt: ich wæne ers uragte umbe daz daz er si verleite baz.》とある。この **ein** ubil hunt はさきの悪魔と同じであって、Wiener Genesis では定冠詞を用いている (der ubele hunt)。しかし文脈から両者が一致することが明瞭であるから、der によって同一化するまでもなかったと v. Kraus は考えるのである。

(5) 文脈により既述性が重要でない場合

既に述べられたことが、その場の関連から重要でない場合、定冠詞で既知性を強調することをやめることがある。たとえば、Wigal. 36, 10 (註 13 参照) の **ein** richiu künegin を Braune は demonstrativ な **ein** と考えたが、v. Kraus は、ここで重要なことは養母の高い地位を強調することであって、彼女が前に述べられた人物と同一人であるということは些細なことにすぎないと説明する。即ち ez zôch **ein** richiu künegin は《war doch ein mächtige Königin, die es aufzog》の意味である。従ってこの **ein** を Prädikat における **ein** と同種のものを見た Behaghel⁽³³⁾と結局は同じ見解の上に立つが、Behaghel は定冠詞を用いなかった理由を追求していない。

(6) 英雄叙事詩の **ein**

詩人が Nhd. と違った立場を選ぶことによって、既述のものを定冠詞で指示することを放棄する場合がある。これはシンタクスよりはむしろ Poetik の問題に属する。近代の読者は、詩人がつねに読者への願慮を忘れないことを期待している。即ち既に語られたものは必ず定

(33) Vgl. Behaghel, a. a. O. S. 135. なお《物をあらわす名詞はそれが種属の単一なる代表者である場合は不定冠詞をとる》(S. 91) という Behaghel の説明を《人をあらわす名詞》にまで拡張することができる。たとえば Walth. 43, 29 daz diu stætekeit der wibes güete gar **eine** krône si; Walth. 46, 32 Aller werdekeit **ein** fügeninne, daz sit ir zewäre, frouwe Mâze; Tauler 15, 23 die minne ist **ein** muster der lutern demüetigkeit. における **ein** はいずれも prädikativ な **ein** で、(eine Krone des deutschen Kaisers, eine Krone des englischen Königs usw.) があるように、(eine Krone der weiblichen Vorzüge) が存在するのである。Parz. 3, 5 scham ist **ein** slöz ob allen siten; Walth. 6, 29 (前出) の **ein** dürrer herze; wir Heinrich von Pfaffwung, **ein** burggräfe (前出) など、すべて同じ源泉から流れ出た **ein** と解することができる。Behaghel のようにアナローギーを持ち出す必要はない。

冠詞を付して、初出のものと区別してくれるのも、その顧慮の一つである。これは原則として Mhd. の詩人においても同じである。

しかしまた詩人が物語の筋の中に没入して、作中の人物と一体となり読者に対する顧慮をかなぐりすてて、筋の進行のままに、あるいは作中人物が見、聞き、語るままに物語るのも一つのテクニックである。詩人はただ pragmatisch な事象だけを描写する。このような場合に Mhd. では作中人物の立場に立った不定冠詞があらわれる。読者や聴き手の側からは当然定冠詞が期待される。だが詩人の眼中に聴者はない。この用法はとくに英雄叙事詩に多いので、v. Kraus はこれを《heldenepisches ein》と名づけている。以下例について v. Kraus の説明をきこう。

Nib. 215, 1 Dô het der herre Liudegêr ûf **eime** schilde erkant
gemâlet **eine** krône vor Sivrîdes hant.
wol wesser daz ez wære der kreftige man.

これまで詩人は聴き手の立場に立って、Sivrit と Liudegêr の戦いを叙してきた。ところがいま、詩人は俄に立場を変え、Liudegêr の目に映じたままの情景を描くのである。Liudegêr の目にはまず敵の楯 (ein schilt) がうつる。次いで彼は楯に王冠の紋章 (eine krône) を認め、彼は相手が Sivrit であることを知る。詩人は Liudegêr の心に起った経過を順を追って語っているのである。詩人が聴き手を忘れ去ることにより、物語は一入生彩を帯びる。それも偶然ではない。Sivrit だと知るや、Liudegêr は味方の敗北を認め、戦いを中止して降服するのである。かかる重大な結果を招来する瞬間であるから、詩人の筆も勢い熱を帯びざるをえない。

Nib. 482, 1 Dannen gie dô Sivrit zer porten ûf den sant
in sîner tarnkappen, da er **ein** schiffel vant.

この船が前に (473, 2) 話されたかどうかは、筋の上からどうでもよいことで、重大なのはニーベルンゲンの国へ募兵に赴くための船を見出したことである。これも新しい歌章の最初の詩節として特別に重大な契機を含む箇所である。

Nib. 510, 1 Dô sah man Sîfride vor in **eime** scheffe stân
in hêrlîcher wæte und ander manigen man.

これは船を見た人々の立場からの叙述である。彼らはただ、Sivrit が船の舳に (vorn in *einem* Schiffe) に立っているのを見るだけである。Sivrit が隠れ蓑を着て漕ぎ出した当の船であることを、彼らは知るべくもない。しかしこれもまた重大な瞬間である。

Nib. 1772, 1 Dô sach der videlære, ein küene spilman,
die edeln küneginne ab **einer** stiege gân
nider ab **einem** hûse……

すでに詩人は《sî gesâzen vor dem hûse gegen einem sal, (der was Kriemhilde) ûf eine banc zetal.》(1761), 《……si ersah ouch durch ein venster daz Etzelen·wip.》(1762) と物語っている。それゆえ聴者はのち 1772 で高貴な王妃が階段をおりて館から出てきたと語られるとき、彼女が窓ごしに眺めていたその部屋から出てきたことを知っている。しかし Volkêr にとっては、王妃が下りてくるのはある館のある階段から (von *einer* Stiege *eines* Hauses) である。即ち詩人は Volkêr の立場に立って不定冠詞を用いている。しかもこれはきわめて重大な瞬間である。Kriemhilt が下りてくる。しかし傲岸な Hagene は席を立とうとしない。この非礼が導火線となって、やがてあの悲壮凄惨な両族死闘の場がくりひろげられるのである。

以上すべて Nibelungenlied からの引例であるが、v. Kraus によれば、この《英雄叙事詩の ein》は、詩人が瞬間的な事件に没入して、もはや念頭に読者も聴き手もなく、詩人と作中人物とが渾然一体となっていることを示すものである。このような状況において用いられた ein が強調的のものになるのは当然である。同様に他グループに属する ein も、理由は違うにしても、しばしば、強調として働くことを v. Kraus は認めている。

以上が v. Kraus 論文の要旨である。この論文はわれわれのテーマに関するもっとも重要な論文であり、しかも入手困難であるので、やや

詳しく紹介した。要するに彼によれば、不定冠詞の意味は古くから今日に至るまで変っていない。ただ思想ないし表象の二重性を、話者がしばしば両冠詞のうちの一つを選んで表現する点が変わっただけである。

8. Nibelungenlied における ein

前にも述べたように、問題の ein がもっとも多く見出されるのは Nibelungenlied (以下 NL と略す) である。Panzer 教授も指摘しているように⁽³⁴⁾、それはこの叙事詩の文体上の特徴ともなっており、この表現形式を正しく把握することは、この詩のスタイルの本質的なものを認識する上にきわめて重要であるとさえ考えられる。従って本章においては問題を NL に限って論じたいと思う。

NL に特に多いのは、ein が聴き手に既知の人名の Apposition と結びついた場合である。

Wormez の宮廷に Sahsen の君主 Liudegêr と Tenemarke の王 Liudegast から挑戦の使者が到着し、Gunther は弟 Gêrnôt や廷臣を呼び集めて対策を練る。勇猛な Gêrnôt が建議する (149, 2-4)。

er sprach: «man wil uns suoehen her in unser lant
mit starken herverten; daz lât iu wesen leit.»

des antwurte Gêrnôt, **ein** riter kûen' unt gemeit.

Gêrnôt の名はすでに聴き手には馴染み深い。彼は詩の冒頭 Str. 4 に早くも登場しており、その後 114, 115, 119, 124, 148 などとその名が見え、その人物も鮮かに浮彫りされている。とくに 119, 4 には《Gêrnôt, der riter kûen unt gemeit》とあって、149, 4 と全く同じ形容詞が付加されている。もし v. Kraus の novum 説を採るならば、119, 4 にこそ ein を用い、149, 4 は定冠詞が用いられるべきではなからうか。Piper 註⁽³⁵⁾は Braune に従い指示的な ein と解しており、de Boor⁽³⁶⁾は《新しい事実を伝えるのではなく、強調 (hervorheben)

(34) F. Panzer, a. a. O. S. 155.

(35) Der Nibelunge Not (Kürschner, Deutsche National-Literatur Bd. 6), Str. 150.

(36) Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, hrsg. von Helmut

で, *jener kühne Ritter* の意》と註している。しかし現代語訳⁽³⁸⁾では de Boor は《Darauf erwidert Gernot, *ein Ritter kühn und angenehm.*》と, 原文通り *ein* を用いている。Simrock はこの行を訳出していない。

333, 2 *gistu mir dine swester, sô wil ich ez tuon,
die scenen Kriemhilde, ein küneginne hêr.……*

これは Prünhilt に求婚しようとする Gunther に助力を懇願された Sivrit の返答である。Sivrit は Kriemhilt と饗宴に同席して (291), 彼女から接吻を受け (297), また相並んで比武を観覧した。彼はいとしい Kriemhilt のために帰国すら断念している。彼は答える, 《高貴な王女, 美しいクリエムヒルト姫を下さるなら欣んでお力添えいたしましょう》と。この *ein* も当然問題となろう。Piper は 149, 4 と同じ解釈であるが, de Boor のテキストは註を欠いている。桜井教授⁽³⁸⁾は Piper と同じく《指示代名詞的用法》と註し, 相良教授は《あの 貴い王女》と訳している⁽³⁹⁾。149, 4 を *ein* で訳した de Boor は, ここでは定冠詞を用いる。Genzmer⁽⁴⁰⁾も定冠詞で訳しているが, Simrock は原詩の *ein* を踏襲している。

同様の用法を列挙すれば,

391, 4 《*daz tuon ich*》, *so sprach Gunther, ein riter küen' unde balt*; 493, 1 f. *dô hôrt' daz grimme strîten verre durch den berc Albrich der vil küene, ein wildez getwerc*; 750, 1 *dô sprach der marcgrâve Gêre, ein recke vil guot*; 1051, 2 *dô klâgete herzenliche Uote, ein edel wip*; 1231, 2 *mit triuwen grôze liebe Etzel ein kunic hêr*; 1476, 1 *dô kom der küene Volkêr, ein edel spilman*, 1673, 4 *der redete vil dâ Volkêr, ein degen küen' unt gemeit*;

de Boor (Deutsche Klassiker des Mittelalters), 1956.

(37) Das Nibelungenlied (Zweisprachige Ausgabe). Heransgegeben u. übertragen von H. de Boor (Sammlung Dietrich Bd. 250), 1959.

(38) 本稿 105 頁を見よ。

(39) 相良守峯訳「ニーベルンゲンの歌」(岩波文庫)

(40) Das Nibelungenlied, übersetzt von Felix Genzmer (Reclam), 1955.

1807,3 Wolhart, **ein** tiwerlicher degen; 1815, 1 des antwurte Rüedegêr, **ein** ritter hôhgemuot; 1900, 1 des antwurte ir Hildebrant, **ein** recke lobelich; 2273, 2 den schilt gezuchte Wolhart, **ein** sneller degen guot: 1772, 1 dô sach der videlære, **ein** küene spilman.

最後の例は他の例と違って、人名ではなく、der videlære という普通名詞の Apposition の場合である。しかしこの videlære が Volkêr を指すことは明らかで、固有名に準ずるものと考えられる。Volkêr と置き換えうるとすれば、1501, 4 ez lobt mit im rîten Volkêr der küene spileman. によって v. Kraus の novum 説は承服しがたいものとなる。また 1051, 2 についても、私は 717, 2. 865, 3 (der edeln Uoten) などから納得できないのである。とにかく上例は既述・既知を問題とすれば不可解な ein である。たとえば、Etsel の国へ赴くブルゴント族の一行が、途中ベッヒュラーレンで Rüedegêr の歓待を受ける条りは、実に 1 歌章 (1650 ff.) のすべてがその叙述にあてられ、きわめて印象的な場面である。しかも 1815 では Rüedegêr の Apposition に ein が冠せられているのである。われわれはここで、現代語への翻訳者がこの ein をどのように処置しているか調べてみよう (Genzmer 訳は C 本を基礎としている)。

詩節, 行 (人名)	Simrock	de Boor	Genzmer
149, 4 (Gêrnôt)	—	ein	—
333, 3 (Kriemhilt)	ein	der	der
391, 4 (Gunther)	dieser	—	der
493, 2 (Albrîch)	ein	ein	der
750, 1 (Gêre)	ein	ein	der
1051, 2 (Uote)	der	der	der
1231, 2 (Etsel)	der	der	dieser
1476, 1 (Volkêr)	ein	ein	ein
1673, 4 (Volkêr)	ein	der	der
1772, 1 (videlære)	ein	der	der

1807, 3 (Wolfhart)	ein	ein	der
1815, 1 (Rüedegêr)	ein	der	der
1900, 1 (Hildebrant)	ein	der	—
2273, 2 (Wolfhart)	ein	—	der

Simrock は原詩に忠実に大部分を ein で再現している。さすがに Gunther, Uote, Etzel の Apposition の場合だけは定冠詞を用いている。(ただし Kriemhilt は ein である)。かつて私は NL における du と ir の交替の問題を論じたときも⁽⁴¹⁾、Simrock 訳が原詩にかなり忠実でありながら、逆の用法もあって不統一の印象をうけたが、ここでも三か所において ein を用いなかった理由は定かではない。de Boor は 149 を註に反して ein で訳し、391 も強調の ein と解しながら、翻訳では Gunther, ein riter küen' unde balt を簡単に der König と訳している。その他は ein と der が半々で、とくに著名な人物には der を用いているように見える。Volkêr については三か所のうち最初の 1476 だけに ein が用いられる。この 1476 は Genzmer が残した唯一の ein として注目すべきである。Simrock の語感に 問題の ein がどのように受け取られたか不明であるが、その大部分を nhd. ein で訳しえたということは注意してよい。de Boor は註釈本ではっきりと解釈を示している箇所 (149, 333, 391, 1231) でも、必ずしもそれを訳の上に生かしていないように思われる。その点一貫しているのは Edda の訳業で令名の高い Genzmer の取り扱いである。Piper が《demonstrativ》と註している 1231, 2 《Etzel ein küneec hêr》は、上掲の訳書が一致して、指示的な dieser または der で訳出しているにもかかわらず、1143, 3 f. 《dô rieten sine vriunde in der Burgonden lant **zeiner** stolzen witewen, diu was vrou Kriemhilt genant.》の ein と同様、導入の ein と見ることができるとはなからうか。即ち Etzel の求婚の使者は Kriemhilt に対して、《Etzel: er ist ein küneec hêr.》と紹介するのである。

(41) 拙稿、ニーベルンゲンリートにおける DU と IR——特にその交替について (一橋論叢第 38 巻第 6 号) S. 42 を見よ。

同様 Piper によって《demonstrativ》と説かれている 1476, 1 も, 172, 2 にすでに《Volkêr der küene man》とあるが, 《Wer der Volkêr wære, daz wil ich wizzen lân.》ではじまる次節から推して, やはり導入の ein と考えるべきであろう。ここでは Volkêr が門地高い騎士として新たに紹介されているのである。

また 422, 1 《er ist geheizen Gunther unt ist ein künec hêr》は, A 本 (401) によると, 《er sprach: hie ist Gunther, ein künec rich unde hêr.》となっている。Zupitza も Lachmann 本に従っているが, ein については Braune 説によって指示代名詞と解している⁽⁴²⁾。Behaghel はこのヴァリアンテに注意していないけれども, Apposition の ein を Prädikat の ein と同じものと見る Behaghel 説にとって, これは有利な例証と言えよう。

さて上の引用例を見て気づくことは, dô で始まる文型と《des antwurte……》の類型が多いことである。そしてその大部分が直接説話を導入する地の文(…は言った, 答えた, etc.)の主語に関係しているのも特徴的である。なお 292, 3

sit willekomen, her Sîvrit, ein edel riter gut.

は Vokativ であるが, やはり Apposition に冠置されたものである。

いったい Vokativ は Mhd. においても Nhd. におけると同様, 冠詞を付さないのがふつうであって(例えば, 552, 1 Sit willekomen, her Sîfrit, ritter lobelîch; 2329, 2 wie habt ir sô geworben, Gunther, künec rich, wider mich ellenden?), 292, 3 は NL における ein+Vokativ の唯一つの例である。ただし, 2329, 2 も C 本においては《Gunther, ein künec rich》となっており, Panzer 教授はこのヴァリアンテがあるいは本源的なものかも知れないと述べ, そこにこの叙事詩の基調をなす古い Preislied のひびきを指摘している⁽⁴³⁾。

人名ではないが, 名剣 Balmunc の Apposition にも同類の ein が

(42) Zupitza, a. a. O. S. 104.

(43) Panzer, a. a. O. S. 160. さらに Panzer 教授はかの ein hohes Ministerium をこのような呼びかけ語から発生したと考え, ein に荘重のひびきと強調の意味を推定している。

見られる。Balmunc についてはすでに (95 f.) 物語られており、われわれは定冠詞を期待するが、次の二か所において、ein が用いられているのである。

955, 1 Dô fuort' er Balmungen, **ein** ziere wâfen breit.

2350, 1 Ouch vorht' er Balmungen, **ein** wâfen starc genuoc.

両文を比較するとき、だれしも文体の類似に気づくであろう。

以上のほかわれわれの語感にひっかかる ein は 20 例を数える。

336, 3 ab **eine** getwerge, daz hiez Albrich.

Sivrit が Albrich から隠れ蓑を奪い取ったことはすでに Str. 97 に見える。《Done kund' im nicht gestriten daz starke getwerc. alsam die lewen wilde si liefen an den berc, da er die tarnkappe sit Albriche an gewan.》

708, 2 unz daz si kômen **zeiner** bürge wit,

diu was geheizen Santen,…… (前出)

1566, 2 dô sâhen s' in dem schiffe riechen daz bluot

von **einer** starken wunden, die er dem vergen sluoc.

渡し守の負うた深傷については、すでに Str. 1562 に語られている。

Nhd. なら von *der* schweren Wunde, die er dem Fergen schlug. となるところである。

1969, 3 mit **einem** scharpfen swerte, daz gap im Ruedegêr.

この剣は 1696 に《Dô gap er Gêrnôte ein wâfen guot genuoc,……》とある剣である。

2297, 2 ……hôher an der hant

huob er **ein** starkes wâfen, daz was scharf genuoc.

これも当然《sein *od.* das starke Schwerte》と訳すべきものである。

496, 2 dô stiez er in di scheiden **ein** wâfen, daz was lanc.

1562, 1 Mit grimmigem muote greif Hagene zehant

vil balde **z'einer** scheiden, da er **ein** wâfen vant.

これらはいずれも剣に関するものであるが、Nhd. では定冠詞または所

有代名詞を用いるところである。Piper 註によれば、このような ein は demonstrativ なものである。もっとも上掲の 336, 3 については Piper の註が欠けているが、おそらく脱落したものであろう。同じく Braune 説を奉ずる Zupitza はこれを指示的なものと解している。なるほど Albrich についてはすでに Str. 96 ff. で語られているが、ここでは全く新しく導入せられたと考えることができるように思う。《それはさる矮人から手に入れたもの。その名はアルプリーヒと云った》という調子である。さきの Balmunc の引例についても同じことが言えるように思う。一般に近代文学におけるほどの合理性・統一性を Mhd. の叙事詩に求めることはむりであって、NL における不統一・矛盾（たとえば数字使用の不自然さのごとく）を指摘することは決してむずかしいことではない。冠詞の用法に関しても、詩人はすでに語ったことでも、一向に意に介することなく不定冠詞を用いているように見える。既知・既述を無視して、しばしば導入の不定冠詞が用いられるのである。既述されたものに ein を冠することは、いわば再生であり、新たなものとして紹介しようとするところには、自から緊張と躍動がある。ein に指示性はなくとも強調性は否みがたいと思う。

708, 2 についてはさきに v. Kraus の説明を見た。同じ分析法に従えば、1566 は《von einer starken Wunde, — der Wunde, die……》となる。Hagene が渡し守を打ちとったことを知らないブルゴントの武士たちにとって、その傷は eine Wunde にほかならない。しかし詩人はとくにブルゴントの武士たちだけを対象として ein を用いたのではなく、読者や聴き手に対して既知の事柄であることはお構いなしに、まるではじめのことを語るような新鮮さをもってヴィヴィッドに語るのである。なお、上にあげた諸例がよく似たスタイルをもつことも注意されるべきであろう。聴き手にとって自明の人物がしばしば不定な表現をとっているのも、同じような修辭的な理由によるものではなかろうか。

328 Des het diu juncfrouwe unmâzen vil getân.

daz gehôrte bí dem Ríne **ein riter** wol getân,
 der wande síne sinne an daz scœne wíp.
 dar umbe muosen helede sít verliesen den líp.

この ein riter が Gunther を指すことは、Str. 325 から瞭然であるし、また 683 2f.

nu was der herre Sífrit wider úz gegân,
 da er wart wol enpfangen von **einer vrouwen** wol getân.
 の《さる美しい婦人》とはもちろん Kriemhilt である。しかしその名は後の詩節にもついにあげられない。あげるを要しないほどに明白である。(Simrock や de Boor は《von seinem schönen Weib》と訳している。) Piper はこの ein を 指示的な意味で用いられていると解しているが、むしろ不定な表現によって深長な意味と Spannung が醸し出されてはいないだろうか。

1584, 1 Si fuorten mit in einen úz Burgonden lant,

einen helt ze sínen handen der was *Volkêr* genant.

これはさきにあげた関係文の先行詞に付せられた ein と同類である。ここで *Volkêr* が新たに紹介されているのは、つづいて《swaz ie begie her Hagene, daz dûcht' den videlære guot》とあるように、Str. 1759 以下における Hagene と *Volkêr* との緊密な結びつきの伏線とも見られよう。ここでは直ちに *Volkêr* の名が言い添えられるが、次の詩節ではじめて名を明かすという形式をとっている場合が 4 例ある。しかし次節をまつまでもなく、読者ないし聴き手にはそれが何びとであるかは明瞭なのである。

1517 Diu kint der schoenen Uoten di heten **einen man**,

küene und getriuwe. dô si wolden dan,
 dô sagt' er dem küenege tougen sinen muot.
 er sprach :……

1518, Er was geheizen *Rûmolt* und was ein helt zer hant,

…

Rûmolt の忠臣ぶりは 1465 ff. に詳細に述べられている。

153, 1 Dem künene in sînen sorgen was idoch vil leit.

dô sah in trurende **ein riter** vil gemeit,

...

154, 1 《Mich nimt des michel wunder》, sprach sô *Sivrit*.

1963, 1 Er sach vor Etzeln tische **einen spilman**.

...

1964, 1 《sô wê mir mîner hende》, sprach *Werbel* der spilman.

Werbel の名はすでに、1374, 1413, 1427, 1430, 1438, 1440, 1451, 1489, 1499 に出て聴き手には親しい。かつて彼が使者としてブルゴントの国に赴いた折に、まず駆けよって彼を迎えたのは Hagene であった。その Hagene が彼の右手を切り落とし、《daz habe dir ze botschefte in der Burgonden lant.》(1963, 4) というのは、彼らが旧知の間柄であることを示している。

2215, 3 daz sach **ein Burgonde**: zornes gie im nôt.

...

2216, 1 *Gérnôt* der starke, den helt ruoft' er an.

も全く同巧のスタイルである。

次に v. Kraus が《heldenepisches ein》と呼んだものについて吟味しよう。

まず 215, 1 f. 戦いは激しさを加え、*Sivrit* も *Liudegêr* も馬をすて⁽⁴⁴⁾、相寄ってきさき鋭く斬り込む(213, 2 f)。 *Liudegêr* の楯の締め金は飛散する(214, 1)。 *dô het der herre Liudegêr ûf eime schilde erkant gemalet eine krône vor Sivrides hant*。 *Liudegêr* は手ごわい相手の楯の上に (ûf eime schilde) 王冠の紋章 (eine krône) を認めるや、直ちに戦いを中止して降服する。楯の王冠により相手が *Sivrit* であることを知ったからである。 *Behaghel* はこれを関

(44) 相良訳に『激しい戦いの中で、多数の武士は馬から下り、また勇士ジーフリトと相手のリウデゲールは、乗馬のまま互に駆けよって戦った。』とあるが、両勇士は馬を下りて戦ったのだと思う。 *an loufen* が徒歩戦であることを示している。〈乗馬のまま〉なら *an rennen* を用いたであろう。 vgl. 190, 1 f. *dô wart er an gerant von drizec sinem mannen*。服部訳(益徳社)も相良訳と同じ解釈をとっている。

係文の先行詞に結びついた *ein* の同類と解し、《Liudeger hatte einen Schild, auf dem war eine Krone gemalt.》と説明しているが⁽⁴⁵⁾、おそらく *erkannt* が脱落したのであろう。これでは Liudergêr が王冠の描かれた楯を持っていたことになる。v. Kraus は前述の通り、詩人が Liudegêr の目に映じたままを叙述していると説明する。ein schilt→eine krône→Sivrit という認識過程を考える v. Kraus の解釈に対して、Panzer 教授は《Die Worte vor *Sivrides hant* gehören zu *schilde* und sind, wie ich meine, nicht aus Liudegers allmählichem Erkennen, sondern aus dem Wissen des Dichters heraus gesprochen.》と異見を提出している⁽⁴⁶⁾。とにかく eine krône の不定冠詞は Behaghel 流に考えれば、必ずしも定冠詞でなければならぬということはない。Sivrides hant についても Panzer 教授の解釈がより自然であろう。要するに問題となるのは *uf eime schilde* である。Piper は《auf einem der Schilde, die gegen ihn gewandt waren》と註しているが、Liudegêr と Sivrit の一騎打ちと考えるべきであるから、Piper の解釈には承服しがたい。

482, 1 の Sivrit が見出した *ein schiffel* はもし C 本が定冠詞を用いていることを考慮に入れなければ、問題にならぬと思う。それが 473, 2 の船と同じである必要は少しもないし、v. Kraus のように重大な契機と関係づける必要もない。ごくあたりまえの *ein* にすぎない。Sivrit は隠れ襲を着て城門を通過して海岸へ下りて行った。そしてそこに *ein schiffel* を見出したのである。

510, 1 の *in eime scheffe* も Nhd. 的語感に少しも逆わないように思われる。v. Kraus はこれを立場の転換から説明しようと試みたが、482 の *ein schiffel* との同一性こそかえって不自然ではなからうか。《er fuort' ez dannen, alsam ez wærte der wint》(482, 4) とあるように、Sivrit が独りで漕いで行った小舟 (*ein schiffel*—Diminutiv に注意!) に、千人もの勇士を乗せて帰ることは現実感をそぐこと

(45) Behaghel, a. a. O. S.136.

(46) Panzer, a. a. O. S. 158.

甚だしいものがある。むしろ帰りは、ニーベルンゲンの国で徴発した幾艘かの船に分乗したと考える方が自然である。in eime scheffe が Diminutiv でない点も注意すべきである。要するに 510, 1 は問題の ein の用例からは除かれるべきであろう。

980, 4 er sach nâch **einem** bilde an des küenen gewant.
Hagene は Sivrit の衣装の上の印をうかがい見た。もちろん Kriemhilt によって縫いつけられた十字の印である(904)。予め Hagene はこの印をたしかめている。908, 4 ff. Hagene im reit sô nâhen daz er geschouwete diu kleit. Als er gesach *daz bilde*, dô schiht' er tougen dan,……従って 980, 4 の不定的表現はわれわれには anstößig と言わざるをえない。にもかかわらず、Simrock は《und sah nach *einem* Zeichen》と訳している(vgl. Genzmer: nach dem Kreuze; de Boor: nach dem Zeichen)。緊張の一瞬である。Sivrit が泉の上に身をかがめて水を飲んでいて、と、er schôz in durch *daz* kriuz,……

1772, 2 f. ab einer stiege gân nider ab **einem** hûse について、Lachmann は、1699 (B 1761) から当然定冠詞でなければならぬと考へ、《abeme hûse》と修訂した⁽⁴⁷⁾。Behaghel は不可解なこの ein を詩人の忘却ということで処理した⁽⁴⁸⁾。v. Kraus は《ab einer stiege》をも問題にしているが、これはそれほどの問題性をもたぬように思われる⁽⁴⁹⁾。《ab einem hûse》だけがわれわれの考察の俎上へのぼせられるべきである。v. Kraus の叙上の解釈はきわめて示唆的であるが、不定的な表現が読者や聴き手を緊張させ、強意的に働くということも否みがたい。

このほか、従来 demonstrativ な ein と考えられた例が NL になお

(47) Lachmann, Anmerkungen zu den Nibelungen, S. 216.

(48) Behaghel, a. a. O. S. 136 Anm. 1: In manchen Fallen beruht der unbestimmte Artikel auf dem Vergessen der fruheren Nennung. Hierher z. B. Nib. 1772, 2; ähnl. 607, 1.

(49) ただし Simrock は両方とも定冠詞で訳している(von *der* Stiege …, die aus *dem* Hause führte). vgl. Genzmer 訳: *eine* Treppe hinunter. , von dem Hause nieder. de Boor 訳: wie von der Tur des Hauses Kriemhilt mit ihrer Schaar über *eine* Stiege zum Hof hernederschritt. Piper 註: von *einer* Stiege herab. 肝心な《ab einen hûse》の註が Piper には欠けている。

いくつかある。

Behaghel が上例と同様に詩人の忘却に基づく不定冠詞と見做しているものに 507, 1 an **einem** morgen fruo huoben si sich dan. がある。an einem morgen が《翌朝》を意味することは前後関係から明らかである (vgl. v. Kraus; Panzer, a. a. O. S. 159)。しかしこの ein を Piper は看過している⁽⁵⁰⁾。

804, 1 an **einem** âbende, dâ der künec saz も同様《国王が席に臨んだその宵には》(相良訳)の意である⁽⁵¹⁾。

1564, 3 er wolde zuo den recken ûz an **einen** sant. も同類の ein であろう。

1668, 1 der wirt gie bi Gêrnôt in **einen** witen sal. の der wirt は Rüedegêr であり, sal は彼の館の広間である。Piper は《in den Prunksaal》と註し, Panzer 教授も auffällig な ein として引用している。しかし私にはこれは導入の ein のように思われる⁽⁵²⁾。そして 1672, 1. および 1674, 2 ではそれぞれ《in dem sale wit》, 《in den sal》と anaphorisch な der が用いられるのである。

1642, 1 man sach ze Bechelâren îlen **einen** degen. も Piper のように demonstrativ (*den uns bekannten*) と考える必要はない。もちろん einen degen が余人ならぬ Eckewart であることは、前節からみて明瞭である。しかし man は城塔の見張り番と見るべきである⁽⁵³⁾。彼らは一人の騎士が急ぎ来るのを見て、早速城主に報告する。そこで、Rüedegêr 自ら出向いて、使者が Eckewart であることを認めるのである (selbe erkande in Rüedegêr)。彼は家来たちを顧みて言う、《ûf disen wegen dort her gâhet Eckewart, ein Kriemhilde man》

(50) Piper 註なし; Grenzmer 訳: früh an *einem* Morgen; Simrock 訳: *eines* frühen Morgens; 雪山訳: きる朝早く; 服部訳: きる朝未明; 相良訳: ある朝はやく。しかし <früh am Morgen> と訳すべきであろう。vgl. de Boor 訳: früh im Morgengrauen。

(51) Piper 註: einem=*diesem* (*bestimmten*); 雪山註: an *demselben* Abende. vgl. Simrock 訳: es war an *einem* Abend, da so der König saß; de Boor 訳: als Gunther *eines* Abends sich zu Tisch gesetzt。

(52) Vgl. Simrock: Der Wirt ging mit Gernot in einen weiten Saal; Grenzmer: In der Burg, der schmucken, lag ein weiter Saal。

(53) Vgl. Panzer, a. a. O. S. 157。

1783 Der übermüete Hagene leit' über siniu bein

ein vil liehtez wâfen, ûz des knopfe schein
 ein vil liehter jaspes, grüener danne ein gras.
 wol erkandez Kriemhilt, daz ez Sifrides was.

Hagene が膝の上に横えている剣は Sîvrit から奪った名剣 Balmunc である。Panzer 教授は Nhd. なら《sein funkeldes Schwert》と言わねばならぬと言うが、しかしこれは《eine lichte Waffe》(vgl. Simrock, Genzmer, de Boor の Nhd. 訳) という限定されない言い方で一向差しつかえないと思う。次行の ein vil liehter jaspes に対応する表現であり、かつそれが Balmunc であることは最後の行ではじめて明かにされるのだから。

9. 結 び

Braune, Behaghel, v. Kraus, Panzer 等一流学者の所説を批判するのは、おこがましい限りであるが、いわゆる demonstrativ な mhd. ein をめぐる諸説を検討しながら、往々ごくふつうの用法の ein が我田引水的に引例されているように思われることがあった。一点に視線を凝らすとき、おのずと視野が狭まるように、論証に急なるあまり、きわめてありふれた ein までもが、問題性をもつかのごとくに錯覚されることも絶無でないように思われる。NL における ein の考察において、私はそのような ein をいくつか指摘した。その際、私自身の語感だけに頼らず、Nhd. 訳を参考として、独断に陥らぬようにつとめた。

さて問題の ein を指示代名詞的なものと見る Braune の解釈は、Behaghel および v. Kraus の研究によって否定されたと考えてよいのではなかろうか。即ち ein は不定冠詞以外の何物でもないのである。しかし Behaghel は、anstößig な ein のもつニュアンスと、der が用いられなかった理由とを明らかにしていない。Behaghel 説における不備は大部分 v. Kraus によって補正せられたが、とくに叙事詩人が読者や聴き手を忘れ、瞬間的な事象に没入して、ただ pragmatisch な出来事だけを描写するとき、しばしば ein が現われることを指摘し、

そこに強調的なものを認めたのは示唆的である。ein の強調的役割を認める点において結果的には v. Kraus と Braune は一致するのである。たしかに ein に指示的な意味はなくとも、熟知しているものが不定的な表現をとることによって、緊張を孕み、やがて強調のひびきをもつことは十分考えられることと思う。しかしながら、いったいこのような ein の用法が Nhd. に至って行われなくなったのは何故であろうか。問題の ein が Ahd. には見られず、また Nhd. に至って廃れたという事実は注目に値すると思う。換言するならば、問題の ein の用法はきわめて Mhd. 的な用法であると言うことができよう。ドイツ語の不定冠詞が発達したのは Mhd. 以後においてであり、Ahd. では未発達の状態にあった。従って Ahd. にはまだ不定冠詞の多様な用法は見られない。近代語がこの非合理的な用法をきらったことも十分理解することができる。問題の ein が Mhd. 特有の用法であるとすれば、この現象をどのように考えたらよいであろうか。H. Maeder は Mhd. における接頭辞 ge- の syntaktisch な用法が、15 世紀以降廃れた原因を Mhd. 的思惟と Nhd. 的思惟との相違に求めているが⁽⁶⁴⁾、Panzer 教授も ein について精神史的な解釈を試みている⁽⁶⁵⁾。不定冠詞は種属や階級の代表として個別化する働きを有する。即ち ein を付することによって個性は止揚せられ、自己の所属する ordo の一員となる。ordo への参劃—それは真に中世的な世界観である！ Mhd. 特有の、とくに NL に多い ein の奇異な現象を、Panzer 教授はこのようにある特殊な世界観の言語的表現形式として説明しようとするのである。NL の文体が類型的な表現を有することはしばしば指摘されるところであるが、たしかに、特殊的なものが秩序の一環となり、個別的なものが典型的なものへ高められるのは、NL の文体的基調でもある。問題の ein がとくに NL に多く見出されるのも、そのような文体上の特徴から説明されうるのではなからうか。

(64) 拙稿、中高ドイツ語における Präfix ge- の文章論的用法について（ドイツ文学 9 号、1952）S. 7 参照。

(65) Panzer, a. a. O. S. 160.